韓国国立中央図書館所蔵『鷹鶻方』(貴159 古朝68-41(朝68-41))全文紹介

－前近代･近代においての朝鮮と日本の放鷹文化交流－

二本松泰子
nihonmatsu.yasuko@u-nagano.ac.jp

〈目次〉

1. はじめに
2.『高麗古本鷹鶻方』の本文
3. おわりに

主題語: 鷹狩り(Falconry)、鷹鶻方(Yo-kotsu-ho)、朝鮮の鷹書(Korean Book of the Falconry)、李兆年(Lee Chō-nen)、朝鮮総督府図書館(Library, Korea-Governor General's Office)、多田正知(Tada Masatomo)

1. はじめに

2010年11月にUAE以下11カ国の鷹狩りがユネスコの世界無形文化遺産に登録された(2012年にはさらに２か国が追加される)。2010年に共同申請した国の中には韓国も含まれている。韓国では、上古の時代には鷹狩りが実施されていたという[1]。高麗王朝時代には王族による鷹狩りの愛好が隆盛したのに応じて鷹坊の官制が整備され、李朝時代にも歴代の王族たちが積極的に鷹狩りを実施した[2]。そのほかにも、上古の時代から諸外国に鷹を進献して外交に役立ててきた経緯がある等[3]、韓国では千年以上にわたって多様な鷹狩り文化が栄えていた。韓国が鷹狩りを世界無形文化遺産に登録されるように共同申請したのも、このような長い歴史によって支えられた伝統に対する意識が影響したものであろう。

このように韓国においては、現代でも伝統的な鷹狩り文化が保護されている。その一環

＊ 長野県立大学 グローバルマネジメント学部 准教授

1) 宮内省式部職編(1931年初版、2010年新装復刻)『放鷹』「朝鮮放鷹史」吉川弘文館。
2) 注1に同じ。
3) 注1に同じ。

として、韓国内において高麗時代に成立したとされる朝鮮の鷹書(鷹狩りの伝書)が現存する[4]。すなわち高麗忠恵王時代の李兆年(字元老、諡号文烈)の著とされる『高麗古本鷹鶻方』である。そもそも『鷹鶻方』を称する鷹書は異本がいくつか存在し、それらの一部は江戸時代に日本にも伝来している[5]。しかし、『高麗古本鷹鶻方』は前近代においては日本に伝わらなかったもので、“朝鮮独自の鷹書”である。このようなテキストの存在は、韓国の伝統的な鷹狩り文化の実態を探る手がかりとして有用なものであろう。その一方で近代になると『高麗古本鷹鶻方』は、朝鮮文化を表象する古典籍として日本人から関心を寄せられるようになる(後述)。

本稿では、このような『高麗古本鷹鶻方』の伝本のひとつを取り上げ、その全文を紹介する。それによって、韓国の伝統的な鷹狩り文化の実態や前近代および近代における朝鮮と日本の放鷹文化交流の諸相を知るために必要な基礎情報の一部を提示することを目指す。

2.『高麗古本鷹鶻方』の本文

先述のように、『高麗古本鷹鶻方』は高麗時代に成立したテキストで、朝鮮の鷹書としては最古のものである。管見において、同書の伝本が韓国内で3本現存することが確認できた。当該伝本を以下に示す。

① 韓国国立中央図書館所蔵『鷹鶻方』(貴159 古朝68－41(朝68－41))

② 韓国国立中央図書館所蔵『鷹鶻方』(古7532－1)

③ ソウル大学校奎章閣所蔵『鷹鶻方』(古615－135 Y58m)

上記のうち、②③は本文のすべてが一致している上、字配りも同じであることから同じ系統の底本を写したものか、もしくは両書のどちらかが底本となっている可能性が考えられる。また、両書の奥書には昭和５年(1930年)における当該書の扱いについて言及されている(後述)ことから、近代以降に書写された可能性も否定できない。そこで、本稿では、上記のような奥書を持たず、原装の表紙や料紙の質感において②③よりも古く見える①を取り上げる。まずは簡単な書誌を以下に示す。

---

4) ただし、現存本はいずれも高麗時代の書写ではない。一部伝本にはハングルの書き込みがある(後述)。

5) 田川孝三(1964年)『李王朝貢納制の研究』東洋文庫刊

所蔵者／韓国国立中央図書館
請求番号／貴159 古朝68－41(朝68－41)
外題／原装の表紙左肩ウチツケ書きで「鷹鶻方」。
前付／鷹色篇論形體　高麗李文烈兆年撰
寸法／縦22.0㌢×横11.2㌢。
丁数／二十四丁。二十四丁表に相当する部分が原装の裏表紙見返しに記載されている。
装丁／表紙・裏表紙は改装(原装の外側に表紙・裏表紙を新たに継ぎ足ししている)。袋綴。五つ目綴の朝鮮書。本文料紙には裏打ちが施されて二紙となっている。半葉八行。漢文体。一部にハングルの書き込みがある。
その他／原装のおもて表紙見返しに「疎開圖書　第251號」の長方印有り。同じく原装のおもて表紙見返しに「朝鮮總督府圖書館　圖書登録番號　昭2.5.21　古1684」の楕円形(横長)の受け入れ印有り。一丁表右上に「조선 총독부 도서관 장서지인(朝鮮總督府図書館蔵書之印)」の正方印(5.5㌢×5.5㌢)、同右下に「국립 중앙 도서관 장서지인(国立中央図書館蔵書之印)」の正方印(5.0㌢×5.0㌢)有り。

次に本文を以下に示す。

- 改行は／で示した。改丁は」をもって示し、(一オ)のように丁数ならびに表裏を示した。
- 虫食いなどで判読不能な文字は□で示した。予想される文字がある場合には、ルビに該当する位置の( )内において末尾に「カ」を付して示した。

鷹色篇論形體　高麗李文烈兆年撰／凡鷹體大者頭欲小其圓如卵(大小同)體小者頭欲大／(雌大雄小)項平如削眼眶圓大而内深胸堂寛廣腰下／挾光臆闊筋鹿脛短者為佳一説脛長細亦佳未知／孰是／論觜啄／

(凡カ)□ (鷹カ)□有青黄二觜(俗呼時高運)觜瘦長向青者為佳大／(鷹カ)□ (觜カ)□實小而鉤小鷹觜實大而短曲者皆性順」(一オ)矣舌與口内色専黒者人皆好之斑白者次之鼻孔／□眼觜間短者性柔且鼻匣上色如(墨)黒者謂鼻／同點其才異凡／

論足／
凡鷹足色有青黄二者青者人皆好之大鷹足小／而脚短踘鼈鱗鹿而指間闊(大小并同)中指瘦長而爪形短／直者捉捷小鷹足大而脚長者手急大抵如鵲足為佳／足項有踝者謂之甕臺足(項者指上如痣實是也其才異常)」(一ウ)

論羽色／

凡鷹有赤水其色多紅 有淡赤水其色微紅 其性完久亦有白水／其色微如淡粉 其性不完皆言胸前羽也／

凡鷹有二點絲點栢點是也又有一種其名曰甫乫者／背色如錦絹然羽幹前羽點大而黃斑體則皆大觜／足並與鷹相似／

論羽名毛□□／

凡鷹羽一曰高古二曰於乙只羽三至十曰縱羅羽俗云大十」(二才)一以后曰步緩俗云建于求音一云一羽曰召羽二羽曰□□□三羽曰於乙只音四曰大后里五曰建于求音／

凡鷹以羽翮多少知其優劣翮者翼之劒羽也取其／堅利謂之劒羽乃勁羽也又莖称領管也有六翮者亦／有五翮者角鷹七翮鶻三翮鴉鶻二翮亦有一翮者以／是知其鈍捷與過不及者矣／

尾羽十二居中二羽曰獨羽今之懸鈴羽是也 又尾羽有五花兒／文亦有六花兒文謂之伐達也獨尾羽有照蒲文其文／如廣徐甫造鉄末端然 亦有吐禲文其如錢半又徐甫造風穴目右二伐達者人多欲之然歲不累 出又有」(二ウ)栢伐達孫伐達半照蒲伐達昇飛伐達者也／

論天質／

凡鷹之性受金方慄逸之氣專火徳之粋精飛擧／遂意所向無常随欲克腸恒無飢渴之逼安有漬／水之食哉是故雖氷雪之上見水則好浴至有凝翮／不能飛者也及其在人逸翰収歛雄心自扃音經言雄心閉開也／蜀音繫的也 足氣困飢飽失蔀楊性不任外焦内渴是／乃坐病之本也人不察其然渴不 (與)□ 水且置烟房因」(三才)此棄之或有烟氣或設燈燭閉窓 (戸カ)□ (不カ)□ (通カ)□ 處也／凡鷹甚悪烟氣且糠烟尤毒慎之非徒養鷹之家／忌之乃令隣家不燻糠火此鷹疾之所由生也／

飼食／

凡鷹食雀鼠鵪鶉鳩子雉鶏猪獐兎之類為宜／忌鹿悪雄鶏又猫捉猟子過夏宿鷹無食則水魚大／者諌巧食之可也又忌土鼠俗號두더지 勿飼雉之脚筋若食／脚筋則必歳双角症極寒之時食肉浸温水洗浄飼」(三ウ)之不寒之時則冷食可也作食者先洗水作食長細切／之洗浄飼之勿為鹿粗作之且雉之皮膚間如涕不／浄之物用雉細羽磨去拭之又去皮子與油膩脚筋／浄洗飼之且以食肉有乾燥處則割去之常時小飼／不至傷食日久貪食則量加飼之／

凡鷹食大鷹則雄雉脚小鷹則雌(雉カ)脚一時一脚適中／

凡治瘦鷹男兒乳汁火温和食飼之温水亦妙冬日連／服温食常時小飼従上食盡下数不拘時飼之以上肥」(四才)為限因多食而生病鷹有不平之氣當忌鴨白鶏／黄狗又忌風犬肉／

養訓／

巣鷹調馴後山野臂行以他術捉生擒雉繫長／縄飛入鷹前放捉甘服如是二三度擇好手放之雉飛入近前者曰為入日時好手也如有捉雉未死則折背死之後眼之午前則小飼午後則梢加眼之肥鷹則只飼頭髄肉小許／

凡新鷹初捉者繫足後以匙掬水二三呻之畏人刼労内熱煩渇故即勧水／於無人暗室之内作架坐之待欲食之候備食

洗浄」(四ウ)潜入勿令驚動繫架自然服之数之勧水甘服架始飼／手食〃〃甘服則作水食飼之鷹元肥則不下肌始捧／昏暁昏暁自初更自鶏鳴鷹痩則上膚後臂常在多處冬寒之時／晝則坐陽夜則無烟凉房内坐之飼水食後小間坐架定食後捧手日漸晝／不離手夜不下韝甘服手食不畏人則用長縄呼引／服食自近漸遠而呼引若不直到其習不棄調／捧鷹注目於韝於上錬羽或拂身或項羽莇疎則始／馴矣調馴幾至可放須登山一二度引食後服塊卵」(五才)隔一日二度二日一度観其性之剛柔量宜服之／

凡鷹下厚内陋者常以塊卵治之須下大小為之塊卵／不一栗棄人髪布子綿花毛羽等物為之性悪者／服強塊卵性柔者服(柔)〇塊卵多日山間捧行鷹有欲／捉之心則放之如有木石輪下鷹察示事欲飛去則此有捉擒之心放日早朝見鷹鼻／毛森堅眼精深冏韝上欠伸不□放之若鼻毛柔／偃眼眶横細韝上擧足者則百倍慎之放日早朝薄切／水食小許飼之上食盡下〃食如在栗子始放若肥而」(五ウ)性悪者従無下食放之放處遠則早去待之放初者日暮見好／手雉入鷹前為好手也放之如有捉雉則勿急走入恐驚而棄去也乃緩歩／而進作聲呼之始待甘食而後潜到先執足皮殺雉／雄則先飼頭髄肉半食餘許而浮取〃〃時先以手指／納鷹之兩脚間二三指并執兩脚則自然放解理鷹／者云暮手捉甘食則其鷹暮必力捉又曰放鷹恣／服熱食則内温合集必遅消下生病而況新鷹畏／人口労之氣未殄者乎只嚙趙端肉而小間氣歇然」(六才)後其雉肉注水更飼半食餘許而浮取為佳／

教習／

凡黄鷹白鷹教之雉鴨〇角鷹教之雉免〇鷂子／教之鶉鵲〇青鸛教之鶉雀〇鴉鵲教之鵝鴈雀鳥／鸛〇籠奪教之鶉與鶫鶫〇燕鵲有名而無教〇／海青籠無所不教而至於折鵬鸇者也昔楚文王好猟有／入献奇鳥者曰此鳥謂海青籠為猟於夢澤毛辟羽／族争嚙競搏此鳥瞪怒目直示之貌目雲際無摶嚙之志王謂」(六ウ)献者曰汝乃欺予耶答曰若放於雉免并豈敢献哉俄而／有物鮮白於雲際不下其形此鳥便聳翮而升之失其所／至須洩毛墜若雪漉血如雨有大鳥堕地度其兩趙間／其間数里众莫能識有博物君子曰此乃鵬鸇也由是／観之無所不教亦有験也凡所教大槩類是尓不須以／名定習也且教習之術備在時人所施巧妙而已矣／

凡鷹不可多放恐其疲労一日多放則一日坐養新鷹尤可慎／之自初放至二三日不過一手四五日二手至一朔一日毋過三四手」(七才)小放為妙多日捉雉慣熟則不拘手数／

理鷹者云始放之後毎日捉食為妙若間断放捉則必／生病三四月温暖之時多放則有労渇之症肚下肛門／多熱則須坐於渓邉水浅處自以尾款水救熱極妙／且冬深逼寒新捕鷹必凍矣坐而上肥二月間天氣／和温時調馴放捉若氣則平膚厚何待仲春初捉鷹必有驚動之／氣以人屎和水或蜜水温水中用竹筒勧之下洩為妙／有寒凍之氣者菖蒲根切如藁豆大畏肉飼之廻出有」(七ウ)暑熱之氣早朝氷細砕湯水割氷牙執鷹頭納氷于喉中／坐架消氷下洩有熱氣則不洩／

凡鷹羽軟弱易折者用塩湯浸洗為妙／

調放後雜理式／

凡鷹放使之日瘦而柔者飼半食上食不下前不捉則飼之小連在下食為宜若尤空則生病矣／肥而性悪者只飼四五點而放之雖冬雪之上無風日暖則／終日放使無害／

凡鷹常有下食為住若空食久行則寒氣易入甚可畏也」(八オ)須慎飼之／

凡鷹雖慣熟放夫者二三日坐養則易生凌雲之氣須／使朝入日捧持放之／

凡鷹肌強性悪内陋者連服強塊卵如人髪栗葉朝入日捧持／之則肌柔性順／

平安氣候／

凡鷹坐於架上猛拂其羽常収一足且宿回觜而挿或／伸兩脚揚氣一夜二三度泄屎大如手掌黒白分離肩」(八ウ)背不動上食俗柔軟下食俗堅剛肛門窄狹而冷常食／速下此乃平安之候也鷹氣和則回觜咀出尾羽膏澤／塗刷翅羽與指爪而後拂身收一足安坐者謂之治寧／此極佳之候也／

不安之候附治療方／

夫鷹鶻本有凌雲之氣而見羈於人飢飽不恣故傷心逼／情□労内熱調保有違失其元氣故生病矣凡用薬／多小随鷹大小施之為住」(九オ)

○凡鷹有内陋下厚者皆以塊卵治之綿花亦當下食兩傍肥厚／圓大而洩屎不浄此内陋之症男屎和食飼之／

○凡鷹肛門元濶而後窄元窄而後濶者有不安之兆也／

○凡鷹有不安之氣則引頸眼睛横引毛羽凛澤／歛羽如束然不肯服食則人参湯浸食飼之月水亦／妙凡不安候□服之常放鷹肌膚忽剛強即為生病人参湯／和食飼之為妙／

○凡鷹有喘息促急大黄末褁食飼之或煎湯滻下又野」(九ウ)人乾水漬食飼之／

○上食堅硬遅下〃食不合食俗緩柔者晝則坐水夜則坐／生白楊木架坐石為妙／

○下食俗緩柔不合者熊膽清心元中小許褁食飼之猪／膽亦妙／

○凡鷹有洩屎不浄蒼茸莝裏虫二三介褁食飼之立／效又屎不浄有臭者服強塊卵回出後勧水下洩則雉／趣端浸屎嚙之甘下後飼食小許或断之折下者黄雀」(十オ)鼠子中捉得去皮羽足觜温服為好又屎不浄月水勧之或浸食飼之鷹鳥不安則放棄屎数〃／所屎細長／

○凡鷹有眼項溺初発時雌熊膽和水以羽塗於眼内已発／則人含□於目鯉魚膽亦妙若不愈則青染布綿造角舗目／上灸目邉在細鈴舗之／

凡鷹有内項溺黄檗樹底有紫虫褁食二三點飼之／理鷹者云黄檗子三介服之然此薬不験矣下有用薬之條鼻項溺其症喘息促急而有／如嘯殻出鼻孔灸於眼鼻間俗號母里以細針貫穿相引後左右各灸十壮」(十ウ)小灸則遅差又鼻上亦灸之有鼻塞在萬病元細末吹入鼻孔楜／椒亦妙／

夫鷹目喎斜含涙口觜上頭白會可灸九壮口兩邉吻／灸六壮後月經水熊膽清心元各○褁雉肉飼

之鼻項溺亦／同足項溺浮腫則青苽葅薄割一面塗塩畀腫處夜／宿又塩和夜宿涎塗之又晝則坐於冷水又以梧桐木架／坐之又以火針刺之且納艾氣又以大口魚皮及曺已魚皮／畀腫處甚妙」(十一オ)

鼓鼻也証／

凡鷹滿身浮腫噴水於羽蘆針皮膚間腫處針灸／各一壯艾炷(炷)灸後月水熊膽清心元雉肉畀飼之／又勧野乾水又人頭骨焚存性和食飼之又石牛黄一分／畀食飼之／

鷹有霜角症屎不通泄且屎中有物大如櫻桃甚／堅者萬病元畀肉如棗子大挿於肛門或含口内則洩／之又水苔真油小和畀食飼之又真油和食連服亦可」(十一ウ)又乳童大便畀紙焼存性細末和食飼之(服雉之脚筋則成此病也)鷹／有不食之候雖二三日不敢勧飼須待欲食之時／

凡鷹服食即退則食不好故也過一食頃更飼一雀児是消／下之状速下則無害又隔一時飼半食可也又服食久而退／則有不安之氣然退食色紅自然則不緊半朽而色黒／則病重矣／

凡鷹羽虫損用狼牙子蓊芎蒼茸若参等根各一握／水一盆煎至半盆細洗之三日相遖三度洗之又虫損羽」(十二オ)以生薑細錬捧納虫處又鯉魚膽又妙旦砒霜于艾灸／之百壯且以□□木油塗之虫損羽／

凡鷹鶻為物所觸眼睛眩迷而勢急用當帰散／

凡鷹結(寒)○多息□月水熊膽石牛黄小便清蜜清心元／各服之為妙又甘丁鳥肉飼之右鳥若朽則右鳥羽畀／雉肉飼之／

凡鷹有虱子者以草木芟湯浴之又梨蘆根栢部根為末／加輕粉黄蓮細研畀食飼之極妙亦用水銀■散亦可」(十二ウ)

凡鷹偸食則上肥内陋坐而下其食後水食二三點及羽塊／卵多少量意服之朝暮捧之適肥後放之／

痩鷹上肥法／

男児乳汁和食飼之又温水漬食数〃飼之則上肥矣／自捉雉且借雉中新捉為温食也冬月或因雨雪或因／執雉于雪水中鷹羽湿而凍則坐於照陽之地且以無／烟細火盛器置於外地遠捧鷹子而向照之又以手照於／細火上烔鷹羽則其羽速乾矣」(十三オ)

凡鷹多放内熱時常食半下後夜必勧水二月以後十／月以前陽氣盛長之時不可當午放使冬月則可服温食／春秋則不可温食常飼水食為妙／

凡鷹春秋下肥無害冬月極寒不可下肥雖坐鷹不／可下肥但性悪者大肥則有揚逸之志須量善飼之／凡鷹小食無害因多食生病但痩鷹小食則痩数／〃必加小食為妙／

凡鷹不放而坐養肥安則懐凌雲揚去之志□雖二三日」(十三ウ)坐鷹須朝暮捧之使其性柔而後

放之為妙／

鷹性巧知其主家亦知其好悪上木不下人作聲呼引湏／使甘服後浮取不然即時浮取則其習不棄／

凡鷹多放擇雌雉而不顧雄雉無他雄雉力強故也／飼食湏擇雄雉而教之／

凡鷹鶻有毀傷處輕粉松脂細末塗之待成痂去痂／後用童便塗之令不成痂如或足脚浮腫以火鉄針／之且納艾氣」(十四才)

凡鷹鶻如有失其郎常飲食不足或退食或食遲下／或所屎渾濁或喘激熱促息脹氣困倦兩睡目晴不／勵毛羽不快凡百病症皆以煮肝元龍腦元黄蓮散治／之為妙／

凡鷹鶻若有内冷外熱所屎成塊白磉青緑者用甘／草湯和食飼之雖無甘草湯用温水湯無妨／

鷹鶻若有促息脹氣鼻塞而目有涙者湏朱砂／散吹之若無則亦用龍腦元此藥尤宜於鶻若無以」(十四ウ)朱砂散以皂角湯代之／

凡鷹鶻不安之候當忌鴨白雞黄狗肉用薬○多少随／鷹之大小為可／

歳在壬戌冬有鴉鷹善才者一日鼻塞急目有露涙／時人皆以謂湏溺欲灸之余以為鷹鶻不可以人病治之／試以朱砂散吹之用煮肝元果有神效至今存焉厥後／余得白黄鷹甚愛之是時鷹病方奥一洞之内如掃／無遺一日此鷹果有退食激熱之症人皆曰避方懸之」(十五才)朱於是用龍腦元從此鷹存焉又今年在椒水而鷹／事方盛競誇其能将還鷹病亦奥生者十常一二朱／之所養有七病勢二兆時無他妙薬止之而以黄蓮散／理之及其還也六鷹無恙唯一鷹凍耳余之所験頗／有姑虱数條明其用薬之效観此足以養鷹之方矣／昔張九岭云夫鷹也者名於尚書取義於詩鶻也者／跡隠於古人史闕其載豈昔之○人多識物亦有遺以此観之鶻之名始見於唐矣夫鳥之鷙者其類有二焉」(十五ウ)曰鷹曰鶻其黄鷹白鷹角鷹鷂子青鸇乃鷹之類也／其鴉鶻兎鶻海青龍籠奪黄鸇乃鶻之類也凡此鷹／鶻非特此類也攀雲以撃鳥之力以為娯故自古及／今王公大人莫不愛之其調養之法亦有類焉晝不離／手夜當保護其勤如此猶此失其蔀常疾病好生或／至掃群鷹者尤甚焉古今之人曾無攻□□□□□□／雖其養之也及其生病也措手待斃□□□□□□／服之観其飲啄□□□□□□□□□□□□□」(十六才)

爰将本身因其□□□□□治之矣□□□□□□□／大抵調養鷹鶻之術皆出戯玩□□□□□□□／意鷹鶻者観此有以得其備急者云□□□□□□□／栢部根黄蓮狼牙根八月採取蒲黄菌月草槌採四月取猪肝大黄〃栢／人参三月採取雄黄麝香三稜六月採取山茨菰千金子大戟陰乾／蒴芎五月陰採乾蒼茸陰乾苦参八月採陰乾朱砂／薬名龍腦元清心元煮肝元朱砂散黄蓮散當帰散水／銀散皂角湯熊膽清蜜月水野人乾」(十六ウ)

剤薬法／

龍腦元龍腦半分研大黄五分人参三分右三味除龍腦合為細末／入龍腦合均滴水作丸〃如小豆以金箔

為衣每服二丸／

朱砂散朱砂一兩研雄黄一兩研麝香半分研三稜半分山茨菰／千金子大戟各一分半蒲黄一分半右八味量四分除蒲黄合為細／

末入蒲黄合均納猪肝内以葉包裹用童便煮熟□／取薬為丸如朱小豆大每服三丸漸加至五丸／

黄蓮散黄蓮一戔黄栢一戔人参一戔蒲(黄カ)□一戔右五味□□□」(十七オ)

作一服并花水一小鐘煎至半鐘去滓(待カ)□冷灌下／

當帰散當帰一分大黄三分右二味咬咀用童便煎去滓(待カ)□(冷カ)□／灌下／

水銀散水銀半分輕粉一分半麝香一分右三味合研不息水／銀星為度拙鷹之有虱處／

皀角湯俗呼奏葉皀角半分水半鐘子煎去滓待冷入鼻／搐之搐謂留之也／

黄鷹右趐中蔀觸物致傷張弛不収先針傷處後」(十七ウ)灸七荘厥疾即愈／

鷹屎有長虫以狼牙草根煎水灌下或細末和食飼之／

凡捧鷹者坐架時須使去架二尺令鷹自然飛上架不／令撃架如有食俗與胸骨扣架致傷則数三日内踰／架慎之／

凡鷹養之不過二連過則養難矣又不幸生病則連縁／傳染以至空架此乃鷹主之吝愛也然則誠非愛／鷹乃為真害鷹也而非博物君子(與カ)□人共之者也」(十八オ)與人共之者難養二連各一連分養不使有病染之／□則此所謂同心同徳者之仁也歟／

桃枝如手母指大者去外皮削内皮細切一合生太半合／木花種半合水荏三升和均爛擣盛小罌掘地取／空罌口稍濶者安懸之以盛薬小罌倒合以粘泥塗／両口合處用糠糀二斗五升埋之加火於上一宿而出／則冷汁如水者在罌底薬油浮在水面以綿糸系串／針通貫相引又以針密刺虫損羽両邉三四箇蝀」(十八ウ)網皮以薬油塗其内外或用鯉魚膽或用砒霜末塗／之以冷水数三匙滴鷹口中立效出聞韶其氏秘方／鼻項溺以口含鷹鼻微呎三四度手執頭後羽呎於／清水没盡鷹眼数三度鷹忽咯則必差鷹鼻／緊呎則鼻精穿破／

凡鷹性不順者煮塩一塊和肉飼之則性柔云／

鷹賦 惟茲禽之化育 寶鐘山之所生 資金方之猛氣 檀火徳之炎精」(十九オ) 何寒者之多端 運横羅之羈束 綴輕絲於双瞼 結長繩於両足 飛不遂於本 情食不□於／情欲 逸翰由而暫歛 雄心為之自扁 若乃貌非不一 相乃多途 指重十字 尾貴舎蘆／

立如植木 坐似愁胡 觜同鉤利 脚等荊枯 亦有白如散花 赤如點血 大文若 細斑似／錦襭 眼類明珠毛猶 霜雪爪剛如鉄 身重若雲 爪剛如鉄 或復頂平如削 頭圓如卵 臆 筋」(十九ウ)濶頭長 麁頭短 趐厚羽輕 髀寛肉緩 求之使用 俱為絶伴

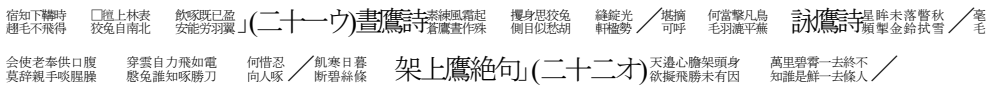
或如鵓頭 或如鴟頸 赤精 細骨／黄足 小肚 懶而易輕 奸而難誘 住不可呼 飛不急走 若此之輩 不如不有 若夫／疾食速消 此如有令 鷹頸猴立 是為無病 厠門忌大 結肚悪軟 條不飲絶 喉不直喘／生於屈者則好巣 於木者則常立 双骹長者起遅 六翮短者飛急

毛衣屡攷 厥色無常 定 揔」(二十オ)生必就 號為黄 二周作鴻 千曰成蒼 雖曰排蘆 性殊衆鳥 雌則体大 雄則体小 遇 得／犬則驚榎 人則馴榎 養雛則小病 野羅則多巧 察之為易 調之実難 格必鳥 室必華／逈 寛 姜以取熱 汝以排寒

鞲須温暖 肉不陳乾 近之令押 静之使安 書不離乎 夜不火宿／微如其毛 小減其肉 飢肥膓瘦 心和性熟 望斬雲霄 志在馳遂 鷹體作詩(二十ウ) 大鷹頭足小 項長大目圓 厥形上寛大 高唇温瘦長 下失層尾短 胸寛体亦重 定 羽／待羽翼鮮 翼短而廣

小鷹頭足大 項短目大圓 尾具舎蘆炎 坐子指瘦長 目圓内捷 坐子如鵲／深 足 形体苟若此 鷹能大小同 放鷹詩十月鷹出籠 草枯雉兔肥 下鞲顧 百擲無／随指 一遣 鷹趐疾如風 鷹爪利如錐 本為鳥所説 今為人所資 孰鮮使了愁 有術世易知」(二十一オ)

取其向背性 制在飢飽時 不可使長飽 不可使長飢 飢則力不足 飽則背人飛 乗飢縦 来飽須／持搏撃 縶 維 所以爪趐切 而人坐収之 聖明馭英雄 其術亦如斯 鄙語不可棄 吾聞諸獵師／養鷹詩養鷹非玩形 所資撃鮮力 少年昧其理 日〃哺不息 探雛 朝暮／細黄口 有餘力



沔川居韓進士状／

右謹言所志矣段隴西接前翰林李太白亦其／矣祖上傳来使用為如乎婢詩今及一所生婢墨／徳二所生婢筆今三所生奴紙筒等四口乙被謫多／年愁火焦肝忿不喩華陰縣逢辱以後日漸增」(二十二ウ)恨五蔵枯旱為彡餘良謫所窮困年老益深／醸酒難継乙仍于放賣計料是如浣花居工部侍／郎杜子美教是槐安吁睡郷北面邯鄲路中適逢／説道為良去乙天寶十三年秋八月下相約二夜至／相對論議矣家蔵五花馬千金裘等物以論價／依数捧上為白遣同翰林自筆成□□人段草□／先生杜甫□保為高適各〃着名成給為白良／去乙巳曽所居隴西郡段路遠萬里帰到不得時」(二十三オ)為白昆如此仁政之下右良縁細〃鑑當推尋／次以立案成給為只為／行下云〃兵使李大信前呈状題只音内上項奴婢乙／謫仙良中實為買得夜郎官斜出則採石江／月以立證不名為彡餘良高適杜甫本無同帰／夜郎之語彸不喩杜甫長懐李太白曰不見李生／久佯狂真可爰云則明知無於是去乙等夜郎／官偽造判然取實不得是彡餘良営段懸筆今」(二十三ウ)墨徳雲孫等戈只背主逃亡已有多年追捕不得方／懐憫慮為□果同詩今押来次以奴壮紙雲孫等先可／報道為去乎相考施行」(二十四オ)

3. おわりに

前節で紹介した①韓国国立中央図書館所蔵『鷹鶻方』の本文は一部抜け落ちている箇所がある。すなわち、②韓国国立中央図書館所蔵『鷹鶻方』と③ソウル大学校奎章閣所蔵『鷹鶻方』によると、①韓国国立中央図書館所蔵『鷹鶻方』の二十三丁表の本文に続く形で以下のような叙述が見える。

白良去乙巳曽所居隴西郡段路遠萬里帰／到不得時居夜郎官斜出使用為族其等徒相當所／任定　体則詩今段本心無邪天性雅鹿既以仙風道／骨之人以長在宇宙之間少無裏老之態日以感發／善心為事上典向為良忠誠至極其矣同類奴千篇／萬首等招致同居朝採萬物之英華夕〃才廉天理之骨／月曳羅列供給為白齋墨徳段様子沙黒色縛面為白／良置天性方正夙志風烟磨頂放踵盡情妓主其心／可嘉為白沙乙餘良其子嫌〃曰梅月清香等不知／其数為白齋華今段本性聰敏才技豪逸凡古今萬／物之理乙平生不忘上典向為良日事左右須曳不／離其子孫

尖頭黒髪白額黄鬚者牸〃為白齋紙筒／段外面純白為良置天性輕薄曲随人意染人誘言／乙仍于其息奴擣鍊奴壮紙奴注紙等及同年婢華／今墨徳并以招引潜隠逃躲為白良去乙推尋不得／為有如乎同詩今所告内湖西各官養之人等婢矣／子息等乙招引兵營城内時方居生是如進告

(韓国国立中央図書館所蔵『鷹鶻方』(古7532－1)、ソウル大学校奎章閣所蔵『鷹鶻方』(古615－135 Y58m)より)

右掲の記述部分においては②③のテキストの方が、①韓国国立中央図書館所蔵『鷹鶻方』よりも詳しい内容になっていることが確認できよう。

さらに、②③には以下のような奥書が見える。

此鷹鶻方一篇即高麗李兆年所著作而安順／菴鼎福珍蔵于家今入テ總督府書庫考也／昭和五年秋文學士多田正知君欲翻謄此書／議及於余〃與君交雖淺而情已深故不敢孤／其托照眼昏手戰字劃不成様良可愧也歳庚／午之小春日延安李秉韶書／

右によると、この『鷹鶻方』一冊は、高麗時代の李兆年の著作で、李王朝の英祖・正祖時代の学者である安鼎福(1712年~1791年)の家に所蔵され、現在は総督府書庫にあるとされる。ちなみに安鼎福とは、朝鮮の歴史書である『東史綱目』などの著作で知られる歴史学者で、正祖の教育係を務めた宮廷学者でもある。このような李王朝時代の宮廷学者が所蔵していた経緯もあってか、昭和５年(1930年)の秋には「文學士多田正知君」が、当該書の翻謄を希望していたという。多田正知とは、1930年代に京城帝国大学で教員をしていた在朝日本人で、朝鮮文学の研究者である[6]。『高麗古本鷹鶻方』は、前近代において日本に伝わらなかったテキストであるが、近代になるとこういった日本人研究者から朝鮮独自の古典籍として関心を寄せられていたことが推測されよう。なお、多田正知の希望を聞いた「李秉韶」という人物については未詳であるが、友情の深さにかけて彼の希望を叶えたいという意向を持っていたようである。

また、『高麗古本鷹鶻方』に見えるような、鷹の種類や技術などに関する知識や薬の調剤方法についての解説は、日本の鷹書にも普遍的に見られる内容である。このような事象

6) 李暁辰(2013年)「京城帝国大学の支那哲学講座と藤塚鄰」「東アジア文化研究科院生論集」第1巻 関西大学ほか。多田正知の朝鮮文学の研究に関する評価については、韓国国内でその賛否がわかれるところである。

は、前近代における朝鮮と日本の間にテキストを介した放鷹文化の交流があったことを窺わせる証左として注目に値するものであろう。

なお、当該テキストの内容に関する具体的な特徴については次稿において改めて検討する。本稿では本文の紹介にとどめておくことをお許しいただきたい。

【参考文献】

宮内省式部職編(1931年初版、2010年新装復刻)『放鷹』吉川弘文館
田川孝三(1964)『李王朝貢納制の研究』東洋文庫刊
田代和生(1999)『江戸時代朝鮮薬材調査の研究』慶応義塾大学出版会
二本松泰子(2012)『中世鷹書の文化伝承』三弥井書店
_____(2018)『鷹書と鷹術流派の系譜』三弥井書店
三保忠夫(2016)『鷹書の研究―宮内庁書陵部蔵本を中心に―上冊・下冊』和泉書院

논문투고일 : 2020년 12월 30일
심사개시일 : 2021년 01월 18일
1차 수정일 : 2021년 02월 09일
2차 수정일 : 2021년 02월 14일
게재확정일 : 2021년 02월 17일

〈要旨〉

韓国国立中央図書館所蔵『鷹鶻方(ようこつほう)』
(貴159 古朝68-41(朝68-41))全文紹介
－前近代･近代においての朝鮮と日本の放鷹文化交流－

二本松泰子

韓国では古くから鷹狩りが実施され、高麗王朝や李朝時代には歴代の王族たちが積極的に鷹狩りをたしなむなど、千年以上にわたって鷹狩り文化が継続した。このような伝統があるため、現代でも韓国は鷹狩り文化を手厚く保護している。たとえば、2010年11月にユネスコの世界無形文化遺産に鷹狩りが登録された際、申請国のひとつに韓国が含まれているのもその事例のひとつである。

ところで、韓国内には高麗時代に成立したとされる朝鮮の鷹書(鷹狩りの伝書)の伝本が多数現存する。それらは『鷹鶻方』と称するテキスト群で、複数の異本があり、その一部は江戸時代に日本に伝来して流行した。本稿では、そういったテキストではなく、前近代には日本に伝来しなかった“朝鮮独自の鷹書”について注目する。すなわち、高麗忠恵王時代の李兆年の著とされる『高麗古本鷹鶻方』の伝本の中から、韓国国立中央図書館に所蔵されているテキストを取り上げてその全文紹介を試みた。その結果、同書には前近代に日本で流布した鷹書と類似する内容が記載されていることや、近代になってから朝鮮の古典籍としての価値が高まって在朝日本人に関心を持たれていた経緯があることなどが確認できた。このような成果によって、韓国の伝統的な鷹狩り文化の実態や前近代および近代における朝鮮と日本の放鷹文化交流に関する基礎情報の一部が明らかになった。

“Yoh-kotsu-Hoh” Owned by the National Library of Korea
(貴159 古朝68-41(朝68-41)) Introduction of the Whole Text
－The Exchange of Falconry Culture Between Korea and Japan in Premodern and Modern Times－

Yasuko, Nihonmatsu

Falconry had been practiced in South Korea since ancient times, with the culture lasting for more than a thousand years, including during the Goryeo and Ly dynasty periods when royalty actively participated in falconry. South Korea carefully preserves falconry culture even in the present day. For example, falconry was registered as UNESCO World Intangible Cultural Heritage in November 2010, and South Korea was among the countries that applied.

On another note, in South Korea, many Korean falconry texts exist (i.e., writings on falconry passed down through the generations) and are thought to have been written during the Goryeo dynasty period. These texts are referred to as “Yoh-kotsu-Hoh,” and many different versions are available. A section of these texts was introduced to Japan during the Edo period, and it gained popularity. In this paper, I will not focus on these types of texts, rather I will discuss the “falconry texts unique to Korea” that were not introduced to Japan during premodern times. That is, from the manuscript of “Kourai Kohon Yoh-kotsu -Hoh” – supposedly authored by Lee Jonyeon during the period of Chunghye of Goryeo, I focus on the text owned by the National Library of Korea and endeavor to introduce the complete text. Therefore, I have been able to confirm the following: this text comprises writings similar to the falconry texts that circulated in premodern Japan, and there were circumstances in the modern era where the manuscript’s value as a Korean classical text increased and attracted the interest of Japanese people living in Korea. Accordingly, I could clarify both the actual state of South Korea’s traditional falconry culture and some fundamental information related to the exchange of falconry culture between Korea and Japan in premodern and modern times.